

惠泉 花の文化史(3)

ジギタリス

西村 悟郎(文化学科)

ジギタリスは日本では5月の花壇を飾る大型の植物として欠かせないものになっている。特に、鐘状の花が房状にたくさん連なって咲く姿は独特で、昆虫が花を出入りする様子、花が風にゆれる様子などを見ていると、どこかヨーロッパの妖精の物語を思い出させる不思議な雰囲気を持っている。ジギタリスはヨーロッパに自生する植物で、古くから身近な植物として人々に親しまれてきた。植物には毒性があり家畜も食べないので野辺でよく繁茂した。その毒性の中に重要な薬効成分が含まれていることが中世の頃から分かっており、大切な薬用植物として人々の身近で育てられた。イギリスでは中世からのコテージガーデンには欠かせない植物の一つとなっている。

1. 原産地と植物名

ジギタリス属はゴマノハグサ科に含まれる2年草あるいは宿根草で約20種がヨーロッパ、北西アフリカおよび中央アジアに分布している。普通ジギタリスとよばれているのは、ジギタリス・プルプレア (*Digitalis purpurea*) で、特にヨーロッパでは身近な植物として親しまれており、「道の曲がり角で、あの紫のヘニン(15世紀の婦人用尖形帽子)を被った中世の貴婦人、すなわちジギタリスに会ったことのない人はいるだろうか」(ブロンズ、1994)と語られたり、「戸外に生えている普通の紫の種類については、勝手にはやしておけばよいと私は思う。」(コーツ、1989)といわれるほど身近な

植物である。また、ジギタリスはヨーロッパでは長く妖精の花と思われていて、さまざまな妖精の名前で呼ばれていた(ウェルズ, 1999)。

学名の *Digitalis* は本来はデイギタリスとよぶべきところを、日本ではジギタリスとよんでいる。学名の意味はラテン語の *digitus* (指) で、花の形が指貫(西洋の指貫は指先にすっぽりかぶせるような形をしている)や指袋(指にかぶせる指サック)に似ているところから来ている(ブロンズ, 1994)。英名は fox glove、和名はキツネノテブクロで意味は同じである。ドイツ名は Fuchshut (キツネの帽子)あるいは Fingerhut (指の帽子)とよぶ。なぜ、キツネなのかについては、ジギタリスの園芸種を発見したドイツ人の Fuchs (キツネの意)の名が英語の fox に代わったと考えられる(中村, 1981)。いずれにせよ、ジギタリスの花の持つ神秘的な雰囲気とキツネの不思議さが合致した物語性に富む名前といえる。また、英名の fox glove について、アングロ・サクソン語のフォックス・グルー (Foxes gleow) から来ているともいう。グルーとは鈴をアーチ状に並べた楽器である。そして、ノルウェー語では「キツネの鈴」とか「キツネの音楽」という(コーツ, 1989)。ジギタリスに関わる話はヨーロッパに多く残されており、それはいかにその植物が人々身近な植物であったかを物語っているといえる。

2. 古い民間の秘薬から見出された強心剤

ジギタリス (*Digitalis purpurea*) は古くからヨーロッパでは毒草として知られており「乾燥させた葉なら 10 グラム、生の葉なら 40 グラムをお茶にして飲ませれば、人ひとりをおそろしく苦しませて殺すことができる。」(ブロンズ, 1994)と言われていたが、反面それは使い様によっては薬効があり「あらゆる病気を治す」(コーツ, 1989)と言われ、民間の秘薬として用いられていた。1775年にスコットランド人の医師ウィリアム・ウィザーリングが臨床実験を行い、強心作用が確かめられ、その後強心利尿剤として用いられるようになった。フランスでは「パリの薬屋は、店の柱や壁に装飾としてジギタリスの絵を描いていた」(コーツ, 1989)。日本には明治12年に渡来したといわれ、明治20年に発布された日本薬局方第一版に「ジギタリ

ス葉」として記録されたほどの由緒正しい薬である。その有効成分は強心作用を有するジギトキシン、ジトキシン、ジタロキシンなどで、その強心剤としての薬効はそれを超えるものが今もって現れないと言われている。処方としては、ジギタリスの葉を加熱乾燥して粉末にし、賦形剤を混ぜて薬効を調節する。これは専門家によってなされるもので、素人がすることではない。ジギタリスの葉を食すると激しい嘔吐を引き起こす。特に、若い苗の草姿は食用に用いられるコーンフリーに酷似するので間違っ食べないように気をつける。

3. 花壇を彩るジギタリスの種類

日本で栽培されているジギタリスのほとんどは *D. purpurea* と、その園芸種であるが、その他にも美しい花をつける種類は多い。日本でもこれから大いに花壇を飾って欲しいものばかりである。以下、それらを紹介していく。

1) *D. purpurea* (ディ. プルプレア)

ジギタリス属を代表する種で、和名はジギタリス、およびキツネノテブクロ。英名は Common foxglove。原産地は西ヨーロッパから南ヨーロッパ。分布の中心は西地中海地域であるが、イギリスにも野生している。前述のようにイギリスでは最も親しまれた野生の草花の一つである。著者は1993年の夏にスコットランドのハイランド地方をドライブしたことがあるが、野辺にジギタリスの紫紅色の花が咲き広がっていたことを思い出す。草丈が1.2～1.5mになる、二年草、あるいは宿根草で、長さ6～7cmの長い鐘状の花を総状花序の片方だけにつける。花の先端は唇形となる。花の色は紫



Digitalis purpurea

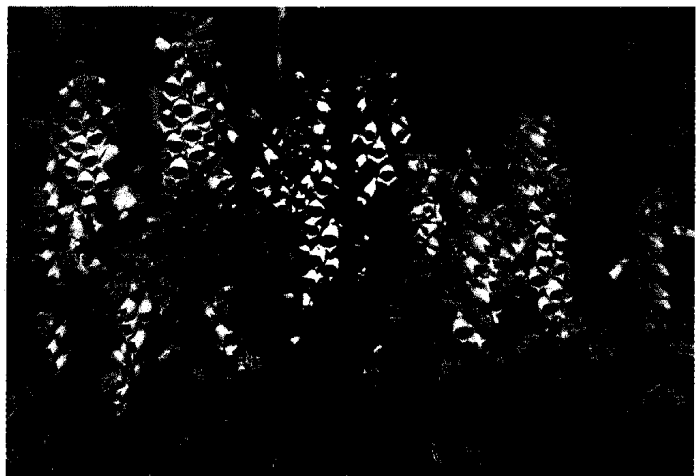
ヨーロッパに原産するジギタリス。古くから観賞用として、また薬草として人々に親しまれてきた。

色で、白、ピンク、淡黄色などもある。花の内側には白地に暗紫色の斑点が入る。夏の暑さを嫌い、宿根草としては夏に弱るので、日本では二年草扱いにして、5～6月に種子を播いて翌春咲かせるほうがきれいに開花が揃う。種子が小さいので、播く時は細心の注意が必要。ポットに数粒ずつ播いて、いくつかの芽が出たところで間引きをして一株にして育てる。秋に花壇に定植する。ボーダー花壇の後ろの方に集団として配置すると、一斉に咲き揃い花壇全体を引立てる。

本種には花全体が純白で内側にも全く斑点が入らない「アルビフローラ」という品種 (forma albiflora) がある。これは白い花が連なる草姿がとても美しい。その他に、種間交雑で園芸品種が作出されており、現在では原種より園芸品種の方が多く栽培されている。そのいくつかを紹介する。まずは「エクセルシア・ハイブリッド (Excelsior hybrids)」である。D. lutea との交配でアメリカで作出された園芸品種。花が水平に咲き、しかも花茎の片方だけでなく周囲に均等に咲きそろろう。花色はクリーム、ピンク、白、黄色など明るいパステルカラーである。草丈は1.8mになる大型種である。たくさんの株が花壇で咲きそろろうと美しい。次に、秋播きの一年草として扱うことのできるのが「フォクシーハイブリッド (Foxy hybrids)」。1967年にAAS賞を受賞した優良品種。草丈90cmほどの小型種で、秋播きができる。花色も豊富で、小型の花壇でも楽しむことができる。

2) *D. grandiflora* (デイ、グランディフローラ)

和名オオバナジギタリス、英名 Yellow foxglove。ヨーロッパから西アジア原産。約1mの草丈で長さ5cmほどの広鐘状の淡黄色の花を総状につける。二年草または



Digitalis grandiflora

輝きのある淡黄色の花が美しい。
草丈は1mほどで、ボーダー花壇の中心に
ふさわしいジギタリスである。

宿根草。日本ではあまり見かけないが、イギリスではボーダー花壇の中心部によく用いられている。この花が咲き揃うと、花壇がとても華やいだ雰囲気になる。

3) *D. lutea* (デイ. ルテア)

和名キバナジギタリス、英名 Straw foxglove。南西～中央ヨーロッパから北西アフリカ原産。二年草、または宿根草。草丈1mほどになり、長さ1～2.5cmの小型の花を密につけ、ほっそりとした総状花序になる。花は淡黄色。葉は長さ5～20cmで光沢があり密につく。一度花壇に植えるところぼれ種子で毎年かなりの数の株が付近に出てくる。丈夫で育てやすく日本の花壇でも丈夫に育つ。

4) *D. dubia* (デイ. デュビア)

地中海西側のバレアリック諸島原産。草丈50cmの宿根草。花は長さ4cmで広鐘状。花の外側は桃色で内側は白に斑点が入る。花の色と形は原種とも思えないくらい美しく整っていて、集団で花壇に植えることのほか美しい。

5) *D. ferruginea* (デイ. フェルギネア)

英名 Rusty foxglove。Rustyとは「錆びた」という意味で、黄褐色の花の色からきている。南ヨーロッパ東部からトルコ、イランに分布する。二年草または宿根草。丈が2mにもなる大型種で、長さ3.5cmと比較的小さい花をびっしりと密につける。株がよく育って花序が林立する姿は壮観である。日本では、まだあまり見かけないが、ぜひ育てたいものである。

6) *D. x meltronensis* (デイ. メルトネンシス)

D. grandiflora x *D. purpurea* の種間雑種。*D. grandiflora* のこじんまりとした草姿と広鐘状の花の形に、*D. purpurea* の紅桃色の花色が入る。花の桃色が美しくボーダー花壇の中央に用いることができる。

4. まとめ

ヨーロッパ原産のジギタリス (*D. purpurea*) が日本にやってきたのは明治12年ごろで、その時は鑑賞用というより強心作用のある薬草としてであっ

た。そして、明治20年に最初の日本薬局方に記録され、薬草第一号として登録された。その強心剤としての薬効は、現在でもそれを凌駕するものは見つかっていないというほど効き目のあるものである。

ヨーロッパの人達にとって古くからとても身近な植物で、その花の形から英名はFox glove とよばれ、妖精の住む花として親しまれてきた。そして、コテージガーデンの植物として欠かせないものであった。近年、種間交雑が進んで、花の色も白、ピンク、淡黄、クリームなど多彩になり、花が横向きにしっかりと咲き、しかも花茎の周囲に均等につく園芸品種も作り出され、花壇植物としての重要性が増してきた。*D.purpurea* 以外の原種も豊富で、大型のものから小型まで、花の形も様々に異なり、色も豊富である。イギリスのガーデンではそれらをうまく組み合わせて、変化に富んだ花壇を作り上げている。日本でも *D.purpurea* 以外の種を、最近見かけるようになってきた。今後、それらをうまく組み合わせたガーデンを日本でも作っていききたいものである。

参考文献

- ウェルズ, D. (矢川澄子訳) 1999 花の名物語 100 pp.98 ~ 100 大修館書店
コーツ, A.M. (白幡洋三郎・白幡節子訳) 1989 花の西洋史 草花編 pp. 95 ~ 97 八坂書房
武田和男・塚本洋太郎 1989 ジキタリス pp. 314 ~ 315 園芸植物大事典 小学館
中村 浩 1998 園芸植物名の由来 pp.144 ~ 146 東京書籍
ハッチンソン, J., R. メルヴィル (奥本裕昭訳) 1987 植物物語 p. 190 八坂書房
ブリッケル, C. (横井政人他訳) 2003 A-Z 園芸植物百科事典 pp. 367 ~ 368 誠文堂新光社
ブロス, J. (田口啓子・長野督訳) 1994 植物の魔術 pp. 198 ~ 200 八坂書房